

はじめにー検証可能な学問に向けてー

山本和明

大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」では、30万点の日本古典籍について、その書誌データとともに全冊の画像を撮影し、web上で公開する。これまで所蔵機関に出向かなければ確認できなかった事柄が、研究者・一般を問わず、世界中どこからでも確認できることになる。研究資料情報の入手難による研究推進の障壁は解消され、資料閲覧を伴う研究分野では飛躍的な深化が可能となる。また、これまでは他の研究分野の書冊として、閲覧手続きの煩多を厭い、閲覧対象にもしなかった書物群のなかに、自身の研究対象に関わる記述を発見したり、様々な研究の可能性が埋もれていることを見いだすに違いない。いわば「知の宝庫」が、人々の前に出現するのである。人文科学の研究者ばかりではなく、自然科学の研究者も、この鉱脈を使わないのは、なんとも勿体ない話であろう。

こうした取り組み、すなわち30万点に及ぶ古典籍資料のデジタル公開は、資料保管、データ保存だけを主目的として行うものではない。それでは一部の研究者に資するだけであるし、大規模学術フロンティア促進事業に言う「フロンティア」とも言えまい。むしろ古典籍を、現代に活かす取り組みを惹起させること、研究者自身がそのことを広く人々に周知していく取り組みにこそ重要な意味をもっている。そのためにも重視すべきは、いかに日本古典籍の画像データを活用してもらうか、またその活用実績が可視化されることにより、さらなる研究動向を生み出すかという点にある。

そのためには我々は何を必要とするのだろうか。

30万点もの古典籍の山を前にして、宝の持ち腐れとはならず、研究者が、自身が求める資料に迅速にたどり着けることが、おそらく何より重要なのではあるまいか。また他の研究者が発表した論文などで引用された古典籍なども容易に確認できることも必要なのではないか。特に、日本語の入力に不慣れな人であっても、論文中に引用された古典籍の画像を入手出来るようにすることが国際的な研究を進めるには不可欠な要素であろう。

そうした事を考えていくなかで、古典籍に難解な漢字などを用いない一種のコードを付すことが必要だとの考えに至った。具体的には、簡易でわかりやすい文字数による古典籍についてのコード、また画像コードを提供することが利用者の利便に直結するものであると考えた。かつ、さらに関連する事

柄の画像を、そのコードを用いて検索してゆくことが将来できれば、活用の可能性は大きく広がってゆく構想した。利用者は居ながらにして、論文等に用いられている資料の確認ができるとともに、関連する書物を次々に視野に納めていけるのである。画像コードを示すことで直接資料にアクセスすることが可能となれば、画像の取り違えといった初歩的なミスは起こりえないし、そうしたミスも直ぐに発見されるはずである。

こうした考えのもと、どのようにコードを考えれば良いかを考える組織として、古典籍共同研究事業センターのメンバーを中心に発足した研究会であり、その当初の発想はHP上*に公開されている研究申請時の文章に書いておいた。その背景を分かりやすく記載し、実際の研究会で議論された事柄については、本報告書に別稿があり、詳細はそちらに譲ることにしたい。ただ、こうした構想のもとで発足した研究は、ちょうど時宜を得たものであったようだ。

* <http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/research.html#section01>

現在、様々なコードをめぐる議論や研究が活況を呈している状況にある。そうした研究の第一線の研究者の方をお迎えし、お話を伺う機会を得たことで、本研究会としても単年度のうちに一定の方向性は確認できたと思う。コードをめぐる多くの議論も、一定の方向へと集約される時期にあたっていたことも幸いしていたのではないかと思う。そうでなければ、多くの課題が残されていただろう。これは、発足当初には思いもしないことであった。

もちろんまだまだ課題はある。今回の報告書にて提案したコードを、より研究者目線に即し、古典籍に即した具体的なものにするため、議論していくことは今後も必要となる。さらにはこうした研究会での提案というレベルにとどまらず、研究者コミュニティにも広く周知する努力は今後継続していかねばならない大切な取り組みである。論文や学会発表時の資料に提示してもらい、実用的なものにする取り組みは重要であり、率先してすすめていかねばならない。研究者が用いなければ、何事も始まらないのである。そうしたことが国際標準として通用させる一歩であり、大型プロジェクトで推進していく国際共同研究にも資するものとなる。

本研究は人間文化研究機構内の国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国立国語研究所及び国文学研究資料館の4機関が連携して実施する共同研究「機構内共同研究」の取り組みの一つであり、国文研が中心となって推進している「総合書物学」の創成の関わる研究である。古典籍コードをめぐる本研究の成果が、今後創成されていく「総合書物学」の一端を担い、研究者に普及していくことを願ってやまない。